会　報
Vol.24　No.2　通巻 136 発行日　2022.06.12

Der Wind
（風）

湘南日独協会
Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan
事務局：〒251-0025　藤沢市鵠沼石上 1－1－1
江ノ電第2ビル7F
Tel：0466-26-3028　Fax：0466-27-5091
E-mail:jdgshonan.official@gmail.com　http : //jdg-shonan.ciao.jp/

日独交流160周年
Jahre Freundschaft
Deutschland－Japan

会長就任のご挨拶

湘南日独協会 会長　島　新

この度、本年2022年4月24日に開催された湘南日独協会の総会において、会長に選任されました。今は亡き松野会長の後をうけて就任された大久保会長のあとを引き継ぐ形で、就任致しました。1988年に設立された、伝統ある本協会ですので、責任の重大さを痛感しており、身の引き締まる想いです。幸いな事に、これまでの会長、役員、諸先輩、会員の皆様のご尽力によって、組織面、運営面はもちろんのこと、活動の内容につきましても、確固たるものが出来上がっておりますので、安心して務めを果たして行く所存です。

ドイツと私との関係は、2001年より6年弱、ドイツのフランクフルトに駐在したことで、深まり、愛着も強くなったと感じます。それまでは、出張では何度も訪れておりましたが、駐在ということになりますと、ずっと以前の1970年代に、6年間ほどニューヨークに勤務した経験はありますが、ドイツでの駐在はこの時が初めてでした。

すでに東西の壁は解消し、ドイツは統一され、西欧の中心としてその存在感は非常に大きなものがあり、又、フランクフルトは交通的にも欧州の中心で、ドイツのみならず、欧州全域を俯瞰したビジネスをするのにも非常に便利でした。しかも、永年あこがれておりましたヨーロッパ文化、ドイツ文化の中心での生活であり、十分満喫できました。

2006年のクリスマスに駐在先から帰国し、しばらくすると、ドイツでの楽しかった数々の思い出が懐かしく蘇ってきました。そのような時に、数年前、湘南日独協会の存在を友人から教えられて早速入会した次第です。

これまで入会された会員の方々の、ほとんどの皆さんは、ドイツに何らかの関心や愛着をもっておられ、会での催しや活動に参加、接触することに喜びを求めておられることと思います。私もその一人でしたし、今もそうです。

幸いにも、湘南日独協会には、そのような会員の皆様のご期待に応える様々な催し、活動がそろっております。

例えば、毎月行われる例会・講演会、「見て聴いて楽しむ音楽史」の集い、ＳＡＳ談話室、読書会（ドイツの名作を原書で読む会）、ドイツ語で歌おう会（Singen Wir Zusammen）。秋の「オクトーバーフェスト」や国際交流イベントへの参加などがあります。

また、ドイツ人および日本人の先生によるドイツ語講座（初級、中級、上級）は、コロナ禍の問題で今は対面でなく、Zoomによる運営をしておりますし、合唱団「アムゼル」への活動支援も行っております。

また、年4回発行している協会の会報「Der Wind」や協会のホームページを通じてこれらの諸活動や催しについて、皆様にお伝えしております。

以上のような諸活動を通じて、皆様の協会に寄せるご希望、ご期待に応えるように、役員とともに、会員の皆様のご支援も得て、微力の限りを尽くして、会を運営して行きたいと考えております。

これからも、皆様の変わらぬご支援、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

4月例会

ドイツ大使館主席公使Dr.フィーツェ氏の講演を聴いて

島　新

2022年4月24日(日)、湘南日独協会主催の例会で、講演会「ドイツと日本の絆」を聴いた。講師のDr.フィーツェ氏は、東京にあるドイツ連邦共和国大使館の主席公使である。同氏の経歴を拝見すると、以下に記載の概略に見られる通り、アジア、とりわけ日本とのかかわりが非常に長く、日本通の方である。日本語も、従って非常に堪能で、講演も日本語で行われた。

Dr.フィーツェ氏

公使は、1963年に、旧東ベルリンに生まれる。ベルリン・フンボルト大学にて日本地域を研究され(専攻：日本語、経済・貿易関係)、1987-1988年に東海大学に留学、その後、ハーバード大学研究員、ドイツ外務省にて外交官研修、EU—ASEAN担当、在大阪・神戸ドイツ総領事館領事、ドイツ外務省本省日本担当、在オーストリア国連ドイツ政府代表部、在日ドイツ大使館広報部長、ドイツ外務省本省中国担当副課長、在中国ドイツ大使館政治部長、連邦大統領府アジア・アフリカ担当課長を経て、2018年8月以降、在日ドイツ大使館主席公使として現在に至る。近々本国に帰任されるとのことである。

公使が話されたことを、ここに逐一再現することはできないが、印象に残ったことと、感想を以下に報告する。

公使は、神奈川県にある東海大学に留学したこともあり、同じ神奈川県にある湘南日独協会には特別な思いがある。

一方、ドイツと日本との間には、永年にわたって築き上げられ培われた良好で強い「日独の絆」がある。だが、３月に突然発生したウクライナにおける残酷な侵略戦争の現実に直面し、今、ドイツは、自国を守るための安全保障政策の見直しをし、独日政府間でも意見交換をしている。（同じ週にドイツのショルツ首相が来日された）。

食料や気候変動などの問題への対処も含めて、独日、G7、EU日本、国連などにおいて、各国は結束し、共同行動をとることが重要であり、強みでもある。また一方、独、日、いずれも相手国によって、貿易や経済の面での依存度を見直さなければならない。日独の友好関係によって連携して何かできるようになると良いし、友好信頼のアクションが必要であると思っている。

会場風景

講演の終盤、質疑応答があり：

日本についていえば、対米依存が大きく、その関係は大事であろうが、それだけでなく自力を向上させなければならないのではないか。それは、軍備だけでなく、外交も含めて。それによって日本が直面している脅威に対しても強いメッセージになるだろう。

講演を終わって強く感じたことは、ドイツは今まで冷戦時代も含めずっと危機に身近に接してきて、戦後ずっと平和な環境にあった日本の我々とは、危機感が、ずいぶん違う。しかもドイツは真っ先に直面するのだと。

講演のあと、人数をしぼって懇親会を開いた。日本語達者な夫人も一緒に、平和な日本での歓談であった。

3月例会

『小倉百人一首』寺澤行忠氏 講演会を聞いて

会員　中村 茂子

藤原定家の国宝『明月記』を見に行ったことがある。友人に誘われて行った五島美術館、ところがせっかくの国宝が、全く一文字も読めなかった。すぐ隣から小声で読んで、ああだこうだと話している声も聞こえた。一念発起、変体仮名を読む講座に通った。教材は江戸期に書かれた「小倉百人一首」。藤原定家との初めての出会いだった。この変体仮名教材の「百人一首」を端緒として、私は和歌の奥深さを知った気がする。

講師の寺澤行忠氏と筆者

そんな私にとって、寺澤行忠先生の「小倉百人一首」講演会は大変興味深かった。

講演は、まず「百人一首」がいかに国民に親しまれ浸透しているか、宝塚女優の芸名を例に挙げることから始まった。ついで、「百人一首」がかるた遊びとして流布したことから、かるたについての説明、すなわち日本古来の貝合わせと、南蛮渡来の「天正かるた」から生まれ、江戸元禄の頃には「百人一首」かるたは大いに盛んになった。尾形光琳の美しい「光琳かるた」にも言及され、その写真本を見せてくださった。こうした美しいかるたは、貴族や大名の子女の嫁入り道具であったという。身近な宝塚女優の名前とかるたを導入として、「百人一首」そのものへお話は進む。

「百人一首」は、百人の優れた歌人の歌を、一首ずつ選んだ歌集である。「小倉百人一首」と呼ぶのは藤原定家が歌を選び、京都小倉山の山荘のふすまの色紙に書いたことに由来する。この選歌については定家の子、為家の妻の父、宇都宮頼綱が行ったという説があった。この頼綱の選歌説を、かつて賀茂真淵を始め支持した者が多かったが、現在は定家の選歌であり、彼の晩年の秀歌観を反映している、と見るのが妥当である。

百首はすべて勅撰集からとられている。勅撰集は、天皇の勅命で編まれた歌集である。

こうした勅撰集を編纂する準備の意味あいもあって天皇主催による内裏内歌合（うたあわせ）も催された。歌合は、二つの組に分かれて、互いに一首ずつ和歌を朗詠して勝負する。歌を詠むことはまことに大事だった。

「小倉百人一首」の種類を見ると、恋の歌が半分を占めている。公的な勅撰集ではないので、定家は好きな恋の歌を取った。「百人一首」は恋愛歌集だと言って良い、と寺澤氏。さらに歌枕、つまり諸国名所を詠みこんだ歌が多い。名所屏風歌の要素もある。　百首は概ね成立順に並べられている。

この後、講演は「歌仙画」に移る。「百人一首」に名を残す歌人三十六人を、藤原公任が選んだ「三十六歌仙」、その姿を描いた鎌倉時代の歌仙絵巻が、大正六年に売りに出された。三十六人の歌人に住吉大明神を加えた三十七枚。余りの高額のため巻物を切断、一枚ずつ切売りした。文化財保護法のなかった時代である。切断時に模写が作られ、その模写でさえ高額だったという。こうした文化財の価値を図る物差しが、つまるところ売買金額になるのは他の美術品と同じということか。

講演は、これより小野小町、伊勢、小式部内侍、式子内親王ら女流歌人に進んだ。謡曲「定家」に描かれた式子内親王と定家との恋にも思いをはせる。

藤原定家による「小倉百人一首」が伝統和歌を国民の間にしみわたらせ、日本人の美意識を形成するうえで、また古典的教養を涵養をするうえで大きな役割を果たしている、という寺澤行忠氏のお話に、心から納得した。

さて、冒頭の『明月記』が一文字も読めなかった話をすると、寺澤氏は言下に「定家は悪筆なんです」

寺澤行忠氏は、ご自身の研究が一段落したあと、海外における日本文化を研究された。

自国の文化を知ってからこそ、他国の文化の理解がある、とのお考えによる。その観点から『ドイツに渡った日本文化』『アメリカに渡った日本文化』の本をお書きになった。

日本の文化、伝統への理解を大事にしたい、とあらためて感じた。

クラシック音楽の楽しみ方　　第 14 回

会員　高橋 善彦

今回はオーケストラの事情についての話(その1)です。演奏会を見ていると、拍手に迎えられて指揮者が登場し、指揮台に上がる前に、Violinの一番前に座っているコンサート・マスタと握手して、それから指揮台に上がります。

コンサートマスタ (Concert master, Konzertmeister)

殆どのオーケストラで、第1ヴァイオリンの一番前に座っている方が、コンサートマスタです。女性の場合はコンサートミストレスと呼んでいた時期もありましたが、今はコンサートマスタと呼ぶようになりました。

音楽は指揮者が先導します。指揮者は楽員とコミュニケーションを取りながら音楽を作り上げて行きます。指揮者と楽員は互いの信頼に基づいて、演奏しています。限られた練習時間の中で、音楽を作り上げる為には、オーケストラ側に指揮者を支える人が必要です。この支える人の代表的存在がコンサートマスタです。コンサートマスタは、第1ヴァイオリンの責任者であると同時に、弦楽器全体の責任者であり、オーケストラ全体の責任者です。

例えば、指揮者が棒を振り下ろした時、実際の音の動き出しを決めているのはコンサートマスタであると言って良い場面は多く有ります。指揮者の指揮棒と呼吸を読んで、音の出足、音の切れ目を決めています。ゆっくりした静かな音楽では、この傾向は顕著になります。

各弦楽器のセクションの一番前に座っている、各弦楽器の責任者、各管楽器、打楽器の奏者は、指揮者と同時にコンサートマスタの弓の動き、動作、息遣いに注目しています。これで、オーケストラ全体の音が揃います。

ここでは、解りやすく責任者という言葉を使いましたが、オーケストラではトップ(Top)という呼び方を使います。第1、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの第1列(第1プルト(Plut, 譜面台の意味))の客席側に座っている人が各弦楽器セクションのトップ、隣に座っている人をトップサイド(Top side)と呼びます。

弦楽器の各セクションは複数の人が同じ譜面を演奏していますので、各演奏者は指揮者とトップに従い、各トップは指揮者とコンサートマスタに従い、支えることで、オーケストラの弦楽器群の音楽を作ります。コンサートマスタと各トップが、オーケストラ音楽の屋台骨となる弦楽器の音楽を指揮者に沿って支える「要」となっています。

演奏の実際面、例えば弓の使い方(bowing)はコンサートマスタと各トップが用意します。指揮者は音楽の特定の箇所の弓使いについて要求する場合もありますが、その箇所以外はオーケストラ側が決めています。

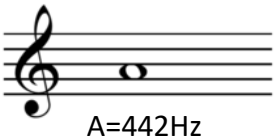
管楽器、打楽器奏者も同様に、指揮者とコンサートマスタに注目して演奏しています。オーケストラの席の配置も、この事を意識してコンマスが見えるかどうか確かめています。このことが演奏以上にハッキリ解るのが、演奏が終わった後、拍手に応えて、指揮者がオーケストラを立たせようとした時、コンサートマスタの動作にオーケストラ全体が従います。時々、コンサートマスタが立たず、楽員も起立せずに、指揮者一人に拍手に応えるように促すのを目にします。

指揮者と練習を通じて、多くの言葉を交わすのは、おそらくコンサートマスタで、指揮者の意図を確かめ、楽員に伝えています。

演奏が終わって、指揮者がコンサートマスタ、各トップと握手、拍手を送っているのには、このような背景があります。指揮者から見て、オーケストラは「自律」した信頼出来る存在であることが、良い演奏をするためにも、また、指揮者が楽員と良好な関係を保つためにも必要です。その代表がコンサートマスタで、補佐役がトップということになります。

コンサート・ピッチ (Concert pitch, Kammerton)

さて、演奏会が始まり、コンサートマスタが登場すると、オーケストラのチューニングがコンサートマスタの主導で始まります。この時に鳴る音はA(ラ)の音で、コンサート・ピッチ(Concert pitch)と呼びます。演奏会で各楽器がチューニングで使うAの音の高さという意味です。



A=442Hz

今は、442HzのAの音を標準のコンサート・ピッチとして使っていますが、これにも歴史があります。

19世紀になるまで、音の高さに標準を決めて使うという概念は存在していません。音の高さはバラバラです。例えば、教会にあるオルガンや鍵盤楽器の音の高さは、同じ街にあっても異なっています。同じ教会でもオルガンの音の高さは時間と共に、パイプの修理などで変化して行きます。

楽器が発達しはじめると、明るい音色を求めて音の高さは上がって行く傾向が出て来ます。17世紀の初めに、楽器の音が声楽の音と比べると高くなっていて、歌い手は歌えなくなったり、リュートなどの弦楽器は弦の音をあわせることが出来ないという問題をMichael Praetorius が著書「音楽大全」の中に書いています。声楽と器楽が演奏する教会での音楽に問題を抱えながら、現場の知恵で対処し何とか演奏するという期間は長く続きます。

18世紀のはじめ、1711年に音叉が登場して、音の高さを定めて行こうとなるのですが、まだ、音叉の音の高さがバラバラな状況は続きます。例えば、1740年の日付のあるHandel周辺にあった音叉のAの音は422.5Hz, 1780年の日付の付いた音叉はAが409Hz, 1800年頃のBeethovenの音叉はAが455Hzという状況です。

19世紀になって、ようやく標準の音の高さを決める動きが起きます。1859年にフランスでAの音を435Hzと定め、標準化しようとします。この標準の音の高さは、フランス・ピッチ等と呼ばれ欧州で普及しはじめます。この後も、標準化への動きは様々起きますが、結局、1939年に開かれた国際会議で、多方面から考慮し、Aの音の高さは440Hzを標準と決まります。

オーケストラでチューニングはOboeの音から始まります。現在のオーボエ奏者は手元に電子チューナを置いて基準音を吹き始めます。ピアノ協奏曲の演奏の様に調律が必要な楽器を使う場合には、その楽器から基準音をとります。現在のピアノは、オーケストラと同じ基準音を使っています。

20世紀の中期から、また、基準音が上がる傾向が起きます。以前の上昇傾向に比べればゆっくりした上昇で済んでいます。現在の主流はA=442Hzです。ベルリン・フィルハーモニーでは443Hzを使っています。

また、現在のバロック音楽などの古楽演奏には、415Hzから418Hzを使うことが標準となっています。これは、オーケストラで使っている基準音より、およそ半音低いことになります。更に、最近は各時代の音楽を再現する目的で、時代と地域から使われていた基準音を再現する試みも行われています。例えば、Leipzig以前のBachのカンタータに使われていた、基準音はA=460～470Hzで、オーケストラの基準音より、約半音高くなります。

蛇足ですが、テレビやラジオの時報の音は440Hzが使われています。

オーケストラのチューニングの基準音にOboeを使う理由には諸説あります。音が良く聞こえる楽器、音を長く吹くのに適した楽器、長さを調整できない楽器であるからという説が有力です。Oboeは楽器に差すリードの抜き差しだけでチューニングします。

チューニングの進め方は各オーケストラで様々ですが、Oboeの基準音をコンサートマスタが取り、このViolinの音を基準にして弦楽器がチューニングをはじめ、弦楽器が終わったら、再度Oboeの基準音から各管楽器、打楽器がチューニングをはじめるというオーケストラが多くなった様に感じています。もちろん、各楽器一斉にというオーケストラも多くあります。

チューニング風景にはオーケストラの性格が反映されています。

湘南日独協会のシュタムティッシュ「談話室SAS」をご紹介します。　　会員　伊藤 志津子

シュタムティッシュは2014年6月に始まり、2020年3月から2021年10月はコロナで休会となり、2021年11月に再開しました。

SASはSchwatzerei＜おしゃべり＞　Am＜で＞Stammtisch＜常連客のテーブル＞の短縮です。

「Stammtisch」の本来の意味は、レストランや居酒屋で常連客が連日のように集まる一角（テーブル）のことです。その席の常連客はビールなど飲みながらその日の出来事を皆に話して聞かせます。

おしゃべりだけではなくトランプ遊びなどで盛り上がることもあり、そのような目的で定期的に常連席に集まるグループも「Stammtisch」と呼ばれます。

湘南日独協会のシュタムティッシュを始めるにあたって、当時の松野義明会長（故人）が集まりの目的として挙げられたのは、――リラックスした雰囲気の中で日本人、ドイツ人、他の外国の人との出会いがあり、気楽に話をする中で「ものの見方」について相互的関心と理解を深める――ということでした。

現在、参加者10名ほどの中にドイツの方も1, 2名おられ、ドイツ語でおしゃべりすることも出来ます。日本と海外の生活習慣や文化の違いを紹介し合ったり確認したりしています。

政治のありかたや教育制度の良し悪し、読書、買い物、料理など話題はさまざまです。最近ではコロナ対策の現状やウクライナとロシアの現実も話題に出ています。

参加者は自由に話すことでよいのですが、2時間を充実させるためにあらかじめその日のテーマを決めて、テーマを決めた人に話の口火を切ってもらいます。必要に応じてその人が資料を持参されることもあります。

参加者それぞれの興味のあり方により、話題がどの方向に進むかは全く予知できません。そこが自由で楽しいです。

2時間の「談話室SAS」の後に皆で居酒屋に向かい、それからが飲みながらのシュタムティッシュとなり、ドイツやスイスのStammtischにより近くなります。

これまでのテーマの一部を参考までにご紹介します。

2014年『外国人』,『自由時間の作り方』

2015年『人と動物のつきあい』,『住まい・生活空間』

2016年『モラル崩壊』,『個人情報保護』,
『Inklusion』,『幸せとは』,
『音声情報と標語にあふれる国』

2017年『日本人らしさ』,『日本のマンガ文化』,
『技術』,『Premium Friday』,『経験から得た知』,
『お金』,『歴史豊かな静岡市』,『大人たちの時間』

2018年『結婚と離婚』,『Fasching 「Die fuenfteJahreszeit」』,『日曜日』,『おもてなし』,
『良寛の足跡を訪ねて』

2019年『ねこブーム』,『元号』,『郷に入っては郷に従え』,『森鴎外』,『NIMBYとは何でしょう』,
『Tokushima Anzeiger』

2020年　『面白かった本の紹介』,『朗読の楽しみ』

2021年　『ドイツにおける弓道』

2022年　『イースターはいつ？』,『コロナ対策事情、ドイツと日本』,『DieGermanen』,『外国人に対する日本語教育』,『アメリカと欧州』

「談話室SAS」に是非お立ち寄りください。
お待ちしております。

日時：月一回（8月は夏休み）第二火曜日。
　　午後3時15分から2時間。

会場：湘南アカデミア、江ノ電第二ビル
　　江ノ電沿線新聞社4Ｆ。

参加費：1,000円

お問い合せ: 伊藤志津子0466-28-4609

劇場便り 29

ブレーマーハーフェン　志賀 トニオ

3か月前には、まさか次の便りが戦争と関連する事になるとは思いもよりませんでした。前回の便りを執筆した直後にウクライナでの戦争が始まり、劇場でもその影響を色濃く受けました。私自身、悲劇的な映像を目の当たりにし、ショックから仕事に集中できない日々が続きました。そして真っ先に心配したのが、同僚のウクライナ人の事でした。この劇場には8年程前からウクライナ人のバレエダンサーが所属していたのですが、その彼が、5年ほど前に同僚で同じ東ウクライナ出身のダンサーを連れてきて、ロシア人のバレエ団のシェフに採用してもらえないか働きかけていました。彼は当時紛争地となっていたドネツクの出身で、安全な所での仕事を探していました。当時はドイツ語も英語も出来なかった彼でしたが、バレエの実力は確かでしたので首尾よく採用されたのでした。彼の両親は今でもドネツク在住だそうで大変心配しています。劇場には他にもオーケストラや事務方にウクライナ人とロシア人がおり、複雑な心境です。

さて、私は2月から4月にかけて指揮をする機会が多かったのですが、その演目はオペレッタの"ヴィクトリアと軽騎兵"とミュージカルの"チェス"でした。そして不思議な事に両演目共、ロシアとの関係（戦争と冷戦）がテーマだったのです。"ヴィクトリアと軽騎兵"は1930年初演のパウル アブラハムの作品です。彼はウィーンオペレッタ白銀の時代の盟主レハールの後を継ぐ作曲家として当時期待されており、この作品もとてもウィットに富み、且つモダンであり秀逸です。

ヴィクトリアと軽騎兵の舞台

残念ながらユダヤ人であった為、ナチスの台頭によりアメリカへ亡命しました。この作品はロシアのシベリアにある政治犯収容所で始まります。収容所で虐げられる様子が描写され、大変心が痛みます。そこにクーデターを企てた罪で捕らわれたハンガリー人の軽騎兵が脱走に成功し、なんと日本に逃れます。ですので、第1幕はシベリアと日本が舞台。そこで登場する横浜生まれの日本人とフランス人のハーフ、リアさんが歌うアリアはマイネ　ママ(Meine Mama)という日本名で30年代に大ヒットしたそうです。実はこの作品、宝塚歌劇団で日本語版が作成されて、当時上演されていたそうです。第2幕はサンクトペテルブルクに移動し、アメリカ大使館に隠れ、ハンガリーに帰国する機会をうかがうのですが、ロシアのスパイに見破られて再度捕らわれの身となってしまいます。最終的には恩赦が出て無事ハンガリーに帰る事ができ、ハッピーエンドであるのが救いです。

チェスの舞台

"チェス"は東西冷戦の最中、アメリカとロシアの選手が国の威信をかけて試合をするお話しです。この作品は、1956年のハンガリー動乱で始まります。ソビエト連邦の支配に反対する民衆が蜂起し、ソ連軍の武力によって鎮圧され場面が描写されます。そこで父と娘(フローレンス)が生き別れとなってしまいます。チェスが好きであったフローレンスはその後アメリカに亡命し、アメリカチャンピオンのアシスタント兼恋人として、ロシア選手(アナトリー)との試合に挑みます。
この試合はアナトリーが勝利するのですが、その時にフローレンスがアナトリーと恋に落ちてしまいます。

抑圧の下生きていく事に疲弊していたアナトリーはアメリカに亡命する事を決断します。そして次の世界戦、彼はアメリカ代表としてロシア選手と戦う事に。ロシア当局は、彼に八百長を持ち掛け、わざと負ければ、フローレンスの行き別れた父親を刑務所から釈放すると約束します。悩んだアナトリーは八百長には応じなかったものの、フローレンスと別れてロシアに帰国する事を決断します。しかし、彼がロシアに帰国した直後に、フローレンスの父は既に死亡している事が伝えられ、絶望のうちに曲が閉じます。

そして今現在稽古している作品は、ヴィクトル ウルマン作曲の"アトランティスの皇帝"です。この作品はユダヤ人のウルマンが第2次世界大戦中、強制収容所に収容中に作曲しました。当時テレージエン強制収容所はナチスドイツが収容者を人道的に扱っている事を外部に宣伝するプロパガンダに使われていました。その為、ウルマンはオペラを上演する事を命じられ、収容されている音楽家を集めて上演する事になりました。オーケストラ14名、歌手7名の小編成でしたが、ゲネプロまで行った後に上演を禁止されました。それもそのはず、作品の内容はヒトラを風刺する物だったのです。

アトランティスの皇帝は開戦を決断し、反抗する者は処刑するように命じるのですが、死を最終的に導く死神が仕事を放棄し、誰も死ねなくなってしまいます。人々が死ぬ事ができなくなって苦しみ悶えて国は大混乱に陥ります。死神は、皇帝自身が、死神の手によって死ぬ最初の犠牲になるのであれば、仕事に復帰すると語りかけます。死を決断する皇帝。そして死によって抑圧と苦痛から解放され自由の身になる事が４重唱によって歌われ曲を閉じます。

ウルマンはその後アウシュビッツに移送されて命を落としてしまいましたが、危険を察知してその直前に友人に楽譜を渡していた為、この作品は奇跡的に世に残る事ができました。

先週は定期演奏会があり、私はチェレスタ、オルガンとチェンバロを担当しました。メインはラフマニノフのピアノ協奏曲第2番で、ウクライナ人のソリストが弾きました。指揮者はマグデブルグ歌劇場の音楽監督でモスクワ出身のロシア人で、大変感動的な演奏会でした。

ミニコンサートのお知らせ

コロナ感染状況は改善を見せておりますが、飲食を伴う湘南オクトーバーフェストは今年も開催が難しく、昨年開催しお楽しみ頂けました、ミニコンサートを今年も開催することになりました。

詳細は9月発行のDer Windでお知らせいたしますが、概要は以下の通りです。皆様のご参加をお待ちしております。

日時　2022年10月 1日（土）
　　13時30分（開演予定）
会場　藤沢市民会館　第一集会展示ホール
会費　2,000円
内容　ピアノ演奏、ヴァイオリン演奏、フルート演奏、21弦琴演奏、合唱団アムゼル演奏、エーデルワイス・トリオ演奏

読書会「ドイツ文学を原語で楽しむ会」の近況

2019年10月 1日に第1回が開催され、昨年急逝された当時の湘南日独協会会長、松野義明氏の指導の下、ヘルマン・ヘッセの「デミアン」を読んできました。コロナ感染の状況により、時に休会することもありましたが、ドイツ人の三浦ハンナ氏のご協力も得て近日中に読み終え、新しい作品に取り組むことになりました。

次に取り上げる作品は、ヘッセの短編「アウグスツス」そしてトーマス・マンの「トニオクレーゲル」となっています。隔週（第1、第3火曜日）月2回の開催で、10数人が出席し、毎回3名ほどが輪番で、訳を発表しています。仲間には105歳の方も参加されています。70代、80代の若者は大変刺激を受けています。

ご興味をお持ちの方は下記へご連絡下さい。

大久保　明　　電話　090 1051 7813
E-Mail akiraokubo@jcom.zaq.ne.jp

第23回定時総会報告 (主要点)

4月24日(日) 13:00～14:00　会場：湘南アカデミア

2021年度の活動報告

コロナの影響で期の前半は延期・中止など大きな影響を受けましたが、後半、コロナの状況も落ち着いてきた為、以下のように実施できました。

○例会：高橋愉紀氏「私の音楽修行について」、兼松藍子氏「浮世絵を楽しむ為の基礎知識」、寺沢行忠氏「小倉百人一首」など、5回。

○見て聴いて楽しむ音楽史：今期より開始の高橋善彦氏によるシリーズ、8回

○ドイツ文学を原書で楽しむ読書会：毎月2回

○ドイツ語講座：初級・中級・上級 (新聞講読、会話)の4コースをオンライン開催

○ドイツ人とのお喋りの会(SAS)：11月から再開

○ミニコンサート(オクトーバーフェストの代替)を10月に開催

○ドイツ語で歌おう(SWZ)：1月再開以降毎月開催。

○広報：会報4回発行、HP及び江ノ電沿線新聞経由での発信

○合唱団「アムゼル」支援

2022年度活動予定

ドイツ語講座、月例会、音楽史、SAS, SWZ, 読書会など、コロナの状況に注意しながら開催してゆきます。また、オクトーバーフェスト、望年会も状況を見ながら検討してゆきます。

役員人事

前期中に松野会長が逝去され、勝亦副会長、小野理事、中嶋理事、大久保会長がそれぞれ辞任された事により、今期は以下の体制となりました：

会長：　島　新

副会長：　木原健次郎

常務理事：大澤由美子、中村茂子、

理事：　伊藤志津子、寺田雄介、鬼久保洋二
高橋善彦、田中満穂

監事：　西澤英男

名誉会長：大久保明

顧問：　織田正雄、大石則忠、古橋昭子、三谷喜朗、西山忠壬、勝亦正安、松川倫子

2021年度の決算報告および2022年度の予算表

	２１年度決算	２２年度予算
収入の部		
１．会費収入等		
前期繰越金	86,232	297,082
入会金	11,000	6,000
年会費	326,000	330,000
寄付金	182,039	
国際交流活動費	50,154	
利息	0	
合計	655,425	633,082
２．事業収入		
例会	165,000	180,000
ドイツ語講座	1,008,650	1,100,000
読書会	177,000	150,000
ＳＡＳ	27,000	40,000
見て…音楽史	87,000	100,000
ＳＷＺ	17,000	50,000
合計	1,481,650	1,620,000
収入合計	**2,137,075**	**2,253,082**
支出の部		
１．運営費		
広報費	138,305	150,000
通信費	60,522	70,000
事務用品費	20,316	30,000
事務局経費	176,744	200,000
諸経費	20,100	31,000
その他	27,160	0
合計	443,147	481,000
２．事業経費		
例会	150,629	170,000
ドイツ語講座	1,030,757	1,050,000
読書会	109,540	100,000
ＳＡＳ	15,360	30,000
見て…音楽史	63,980	75,000
ＳＷＺ	11,580	32,000
合唱団育成費	15,000	15,000
合計	1,396,846	1,472,000
支出合計	**1,839,993**	**1,953,000**
差引余剰金	**297,082**	**300,082**

編集後記

○新体制での運営となりました。コロナ感染状況は落ち着きをみせています、今期も皆さんのご協力を頂き、会報Der Windもさらに充実した内容にしてまいりたいと思います。ご投稿、またご意見などをお寄せ下さい。

（大久保）

湘南日独協会催事カレンダー（2022年6月～2022年10月）　6月12日現在の情報です

6月	読書会	21日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
	談話室SAS	14日（火）	15:15-17:15	江ノ電第2ビル　4階	会費：1,000円
	SWZ	18日（土）	15:00-17:00	ミナパーク５０７	会費：1,000円
	講演会	26日（日）	14:30-16:30	江ノ電第２ビル　７階 湘南アカデミア	会費：1,000円
	演題：「ドイツ連邦共和国憲法と日本国憲法」 講師：Dr. H. メンクハウス氏　（明治大学教授） 概要：1946年11月3日に交付され、1947年5月3日に施行された我が国の憲法は、戦後常に、議論されながら、いまだなお、解決されていない政治社会上の大きな問題です。外国の憲法、就中、ともに敗戦国であったドイツ連邦共和国憲法と比較することは、我が国の憲法を改めて考える上で必要ではないでしょうか。講演は、日本語で行われます。 懇親会：有り				
7月	**見て聴いて楽しむ音楽史（第12回）**				
		7日（木）	14:30-16:30	江ノ電第２ビル　７階 湘南アカデミア	会費：1,000円
	演題：弦楽器の音楽 講師：高橋善彦氏　（会員　湘南日独協会理事） 取り上げる曲：弦楽合奏の名曲（バッハ、モーツァルト、ドヴォルザーク、ピチカートだけの曲等）				
	読書会	5日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
		19日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
	談話室SAS	12日（火）	15:15-17:15	江ノ電第2ビル　4階	会費：1,000円
	SWZ	21日（木）	15:00-17:00	ミナパーク５０６	会費：1,000円
	講演会	24日（日）	14.30-16:30	江ノ電第2ビル　7階　湘南アカデミア	会費：1,000円
	演題：「ドイツにおけるコロナ対策」 講師：ハンナ　ダウシュ　三浦 概要：永年日本に在住され、日本とドイツの事情に明るい講師の方より、ドイツにおけるコロナ対策事情について、お話しいただきます。 懇親会：有り				
8月	**見て聴いて楽しむ音楽史、談話室SAS、SWZ、講演会は休会です**				
	読書会	2日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
9月	**見て聴いて楽しむ音楽史（第13回）**				
		1日　（木）	14:30-16:30	江ノ電第2ビル　7階 湘南アカデミア	会費：1,000円
	演題：バロック音楽（その１） 講師：高橋善彦氏　（会員　湘南日独協会理事） 取り上げる曲：イタリア・バロック音楽				
	読書会	6日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
		20日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
	談話室SAS	13日（火）	15:15-17:15	江ノ電第2ビル　4階	会費：1,000円
	SWZ	15日（木）	15:00-17:00	ミナパーク５０７	会費：1,000円
	講演会	25日（日）	14.30-16:30	江ノ電第2ビル　7階　湘南アカデミア	会費：1,000円
	演題：「ドイツ留学の夢　ー Darmstadt滞在通算６年半」 講師：中川淑郎氏　（横浜市立大学名誉教授） 概要：講師の研究分野である糖化学が発祥した、あこがれのドイツに留学、Darmstadt工科大学での充実した研究と日常生活の様子が紹介されます。 懇親会：有り				
10月	**10月の行事は項目のみ記載、詳細は9月発行の次号に掲載予定**				
	ミニコンサート（オクトーバーフェストの代替行事）				
		1日（土）		藤沢市民会館　第一集会展示ホール	会費：2,000円
	見て聴いて楽しむ音楽史（第14回）				
		6日（木）	14:30-16:30	江ノ電第2ビル　7階 湘南アカデミア	会費：1,000円
	読書会	4日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
		18日（火）	15:00-17:00	ミナパーク５０５	会費：1,000円
	談話室SAS	11日（火）	15:15-17:15	江ノ電第2ビル　4階	会費：1,000円
	SWZ	20日（木）	15:00-17:00	ミナパーク５０７	会費：1,000円
	講演会	休会			

参加される皆様へ　参加人数を制限する場合があります　早めにお申込ください　来場の際はマスクの着用をお願いします。懇親会は、講師を含め6名、最大8名に人数を制限します

各催しは変更される場合があります，最新の予定を当協会のホームページでご確認ください

URL：http://jdg-shonan.ciao.jp/#event　　次のQRコードからもアクセス出来ます